

新病院長に安達伸生教授が就任



「患者さんの包括的な
健康と幸福を目指す」

2024年4月1日付で広島大学病院長に就任しましたので、ご挨拶申し上げます。

私たち広島大学病院は、国民の健康と福祉の向上のために、「全人的医療の実践」「優れた医療人の育成」「新しい医療の探求」の基本理念を掲げ、地域の皆様に高度で安全な医療を提供しています。

高度で安全な医療を提供

広島大学病院は医科と歯科が統合された国内でも数少ない医科歯科連携病院であり、全人的医療を目指して、心身の病気の治療のみならず社会活動を含んだ患者さんの包括的な健康と幸福を目指した治療を行っています。近年、医療は目覚ましい発展を遂げ、ダヴィンチやhinotoriなど最新機器によるロボット手術、細胞や成長因子、新しい医療機器を用いた再生医療、がんゲノム医療、AIを利用した早期診断など高度で複雑な治療が行われています。これらの新しい医療技術を安全に患者さんに届ける必要があります。広島大学病院は特定機能病院として、がん診療連携拠点病院、小児がん拠点病院、がんゲノム医療拠点病院など多くの診療拠点として、高度で安全な医療を提供する体制を構築しています。その他、大学病院には未来の医療を託す優れた人材の育成という大切な役割があります。広島大学病院が立地する広島大学霞キャンパスには、医学部医学科・保健学科、歯学部、薬学部、大学院医系科学研究科、原爆放射線医科学研究所もあり、医療系キャンパスとしての総合力を基盤として、全人的医療、医療安全の知識を身につけた多職種にわたる医療人の育成にも力を入れています。

大学病院とスポーツ

私自身は整形外科医であり、多くのスポーツ選手の治療を行ってきました。広島市は全国的には中規模の都市ですが、広島東洋カープ、サンフレッチェ広島、広島ドラゴンフライズなどのプロスポーツチームや数々の実業団チームが存在し、大変スポーツの盛んな都市です。地元チームの活躍は広島市民、県民に元気と活力を与え、地域を大いに盛り上げてくれます。広島大学病院スポーツ医科学センターでは、スポーツに関連する様々な施設・団体・地方自治体と協力することで、プロスポーツ選手のみならず、広い年代のアスリートのトータルサポートを行っています。これらの活動によりアスリートの競技力向上や外傷・障害予防に貢献することを目標としています。また、プロ野球やJリーグなどのような

能登半島地震 医師や看護師ら派遣 DMAT隊など約30人が現地入り

令和6年元日に発生した能登半島地震は、多くの犠牲と被災者を生みました。広島大学病院は、1月11日から避難所や災害対策本部の支援のため約30人を派遣しています。DMAT(災害派遣医療チーム)、JRAT(大規模災害リハビリテーション支援関連団体協議会)などさまざまな枠組みで現地入り、被災者に寄り添いました。3月7日には院内で「能登半島地震医療支援報告会」を開き、現地の状況や支援活動、課題などを報告しました。



派遣したのはDMAT3隊、JRAT2隊、JMAT(日本医師会災害医療チーム)、DICT(災害時感染制御支援チーム)、災害支援ナース、災害登録派遣薬剤師です。大学病院単独チームや広島県チームの一員として、それぞれ数日間の支援活動に取り組みました。発災から少し時間はたっており道路は一応通っていますが、亀裂があったり道路脇の民家が崩れていたり、危険な状況もあったといえます。その影響で被害が大きい能登北部へ入るには、3~4時間かかることもあったそうです。

避難所回りニーズを確認



避難所ではそれぞれの役割に応じて聞き取りなどをして、ニーズを把握して対応。重症患者の搬送を担うこともありました。1.5次避難所の開設に立ち会ったチームは、感染者や介護者など見守りが必要な被災者もあり、感染拡大防止に努めたといえます。同じく感染対策チームも、感染者との導線の分け方や隔離対策などを助言。ただ避難所や施設ごとに状況が違い、状況に応じた対応が重要だと指摘しました。

福祉施設では、人手が足りず入所者の栄養状態が悪化したり、感染が流行したりするなど厳しい状態にあったといえます。さらに物資を届けるのが難しい上に、長時間の断水で衛生状態が悪化し感染リスクも高まると指摘していました。特に看護師の不足が深刻な状態だったといえます。

患者搬送作戦や環境整備

JRATは避難者の身体能力などから福祉避難所に入るべきトリアージ方法を考案し実施、実際に数人を福祉避難所へつなぐ対応を進めました。避難所の環境などにも着目、トイレなどに転倒防止の手すりや滑り止めマットなどを設置しました。また、簡単なストレッチや集団体操なども指導し、関連死の防止に努めました。

DMATでは建物自体が崩落の危険があるため、1病院全体三十数人の患者搬送を担ったケースも。患者、家族のニーズを聞きながら搬送先を決め、自衛隊の大型ヘリコプターなども利用しながら一日で対応しました。ただ大型ヘリは暖房機器もなく重症患者の搬送は難しかったといえます。広島大学病院が被災した場合、少ない人数で入院患者の治療をどう継続するか、また搬送方法なども検討しておくことが必要との指摘もありました。

派遣隊 役場廊下で雑魚寝も

対策本部での活動は、福祉施設からの聞き取り窓口を設置し、聞き取りシートで定型化することで効率化を進めました。情報収集と適切な物資の分配や現地ニーズに合った支援計画の立案が求められるとしています。

派遣隊員の生活はさまざま、ホテルや病院での宿泊先があれば、役場の廊下で雑魚寝し、シャワーもなかったチームも。食事は持って行った非常食が基本で被災地に配慮した対応となりました。

高度救命救急センターの志馬伸朗教授は「新たな経験も生かし、今後の支援につなげたい。災害はいつどこで起きるか分からない。こちらの備えも進めていく」と総括しました。

・ 災害関連死防止へ ----- JRAT 三上幸夫教授(リハビリテーション科)

今回、災害リハビリテーション支援のために1月24日から石川県で活動を行いました。特に輪島市の被害は甚大で、多くの被災者が避難していましたが、身体機能のトリアージは行われておらず、支援を行う避難者の選定に苦慮しました。そこで我々は簡易身体機能トリアージ法を考案して、全ての避難所で身体機能トリアージを実施。避難所では身体機能が低下した避難者を把握することも重要であり、災害関連死防止に繋がります。

・ 災害医療に生かす ----- DMAT 大下慎一郎准教授(救急集中治療科)

交通網の発達していない能登半島先端を中心に被災したため、能登町の避難所で被災者と一緒に寝泊まりしながら、医療支援を行いました。倒壊しかけた病院の全入院患者を自衛隊ヘリで県外へ避難させたり、介護の手が回らず死亡者が増加していた高齢者福祉施設に医療支援を行ったりました。南海トラフ地震が起これば、広島も被災する可能性があります。今回の経験を広島が被災した際の災害医療に活かしていきたいと思います。

・ つながり大切に ----- 災害支援ナース 在川和看護師(ECU)

1.5次避難所の立ち上げに参加して、小松総合体育館で31名の被災者を受け入れました。受け入れ時は元の生活に戻ることを意識して、健康確認や内服指導、健康相談などを行いました。被災者の皆さんは普段は気にならないような健康面のことで不安に感じておられましたが、医療者の介入や避難者同士の関わりによって、「独りじゃないから頑張れる」と言われていたのが印象的でした。人と人のつながりの大切さを感じました。



看護師

看護師
看護

看護師
看護師

看護
看護師
看護師

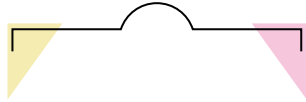
看護

看護師
看護師

看護師

看護師

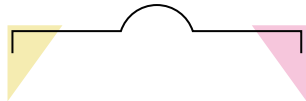
看護
看護師



看護師
がん看護
石原 美紗子

03 将来へ向けて
な ん て 向 き

ん
など
て き て き



01 どんな仕事？

んへ
な
て て
き き
て て

感染管理
森 美菜子

は
は な か て
向 て な て へ

02 きっかけは？

03 将来へ向けて

Grid paper with redaction marks:

- Top left: Black irregular redaction mark.
- Top right: Gray rectangular redaction mark.
- Middle right: Two horizontal gray rectangular redaction marks.
- Bottom left: One horizontal gray rectangular redaction mark.

Two colored rectangular boxes within a pink border:

- Left box: Light pink.
- Right box: Light green.